

会 議 録 (1)

会 議 の 名 称	令和7年度 第2回入間市総合教育会議
開 催 日 時	令和7年12月25日(木) 午後1時30分 開会、午後2時51分 閉会
開 催 場 所	市庁舎 B 棟5階 第4委員会室
議 長 氏 名	-
出席委員(者)氏名	市長 杉島理一郎 教育長 中田一平 教育長職務代理者 山本和人 教育委員 橋本清美 教育委員 齋藤良徳 教育委員 齋藤悟
欠席委員(者)氏名	-
説明者の職氏名	企画部副参事(未来共創政策推進担当) 吉田純子 企画課未来共創政策推進室副主幹 齊藤祐樹 教育部参事兼学校教育課長 山崎大志 こども支援部長 黒木 聡子 こども支援部こども支援課主幹 島田 英子
会 議 次 第 (公開・非公開の別)	(すべて公開) 1. 開 会 2. 挨 拶 3. 協議・調整事項 (1)社会や民間などさまざまなリソースを活用した豊かな学び 4. 報告事項 (1)ヤングケアラー支援シンポジウムの実施について 5. その他 6. 閉 会

配 布 資 料	資料1-1:社会や民間などさまざまなリソースを活用した豊かな学び 資料1-2:社会や民間などさまざまなリソースを活用した豊かな学び 資料2:「全国ヤングケアラー支援シンポジウム 2025from 入間～日本初の条例制定市の『次の一手』～ 事業概要報告」
関係者職氏名	教育部長 浅見泰志 教育部次長 新屋朋徳 教育部参事兼教育総務課長 増岡哲也 教育総務課主幹 小久保昌宏 教育部参事兼学校教育課長 山崎大志 教育部副参事(教職員指導担当) 野口将茂
事務局職員職氏名	企画部長 浅見嘉之 企画部次長 片岡成浩 企画部副参事(未来共創政策推進担当) 吉田純子 企画課未来共創政策推進室副主幹 村上俊 企画課未来共創政策推進室副主幹 齊藤祐樹 企画課未来共創政策推進室主任 松岡美紗 企画課未来共創政策推進室主事 高橋佑季
会議録作成方法	要点筆記
傍 聴 者 数	-

会 議 録 (2)

議 事 の 概 要 (経 過) ・ 決 定 事 項

<協議・調整事項>

(1) 社会や民間などさまざまなリソースを活用した豊かな学び

国内における取組事例や国の動きの紹介、入間市での取組状況について報告し、それに対して市長、教育長及び各委員が意見交換を行った。

<報告事項>

(1) ヤングケアラー支援シンポジウムの実施について

令和7年11月26日に実施した「全国ヤングケアラー支援シンポジウム2025from 入間」について報告した。

会議録(3)

発言者	発言内容
	(委員及び事務局の発言が行われた部分のみ記述する)
企画部長	<p><進行:企画部長></p> <p>1. 開会</p> <p>2. 挨拶</p> <p>3. 協議・調整事項</p> <p>(1)社会や民間などさまざまなリソースを活用した豊かな学び</p> <p>「社会や民間などさまざまなリソースを活用した豊かな学び」について、説明を願う。</p>
齊藤副主幹	<p>入間市教育大綱策定の年間スケジュールについて説明する。</p> <p>(資料1-1を説明)</p>
学校教育課長	<p>市内小中学校での取組について説明する。</p> <p>(資料1-2を説明)</p>
企画部副参事	<p>他自治体の事例や国の取組について、説明する。</p> <p>(資料1-1を説明)</p>
企画部長	<p>意見交換を行う。委員のご意見を願います。</p>
市長	<p>学校は体系的な学びを進める重要な場である。一方で、こどもたちが実際に活躍している人や現場で活動している人といった「本物」に触れる機会は人格形成において重要であると考え。総合的な学習の時間で学びを補完すること</p>

発 言 者	発 言 内 容
教育長	<p>にとどまらず、さらに上を目指していきたい。</p> <p>資料1-2 において取組事例として紹介されていた、スポーツライミングを体育の授業で実施することや、人間ガスと連携した調理実習を家庭科の授業として実施することなど、教科の授業においてプロの力をどのように活用できるかが、豊かな学びにつながると考える。こうした教育が広まることを目指していきたい。また、こどもたちには、伝統文化を通じて国家観を育ててほしいという思いがあり、それが非認知能力や多様性・利他的思考の育成につながればよいと考える。加えて、アントレプレナーシップの考えのように自ら起業する力や新しい道を切り開く力を備えた人材を育成できればよい。市として、プロ人材を幅広く受け入れられる環境を整備するとともに、学校がプロ人材へアプローチしやすい入間市を目指していきたい。</p> <p>教育委員会としても推進していきたい学びそのものである。教員は教科書を用いた指導の専門家である一方で、「豊かな学び」は教科書を離れたところから生じることが多く、教員養成課程だけでは十分に学びにくい領域でもある。今後は、多様性の理解、他者と自分の違いを認識し、その中で自己を捉える機会を重ねていくことが重要である。要点としてまとめられていた非認知能力を育むためには、直接体験や、価値観の異なる人との交流が不可欠であり、積極的に進めたい。</p> <p>積極的に推進するにあたっては、学校のみでは難しく、地域の協力を得られることは大変ありがたい。学齢期に市内企業や各種団体の素晴らしさを知ることによって、「自分が入間市の企業・団体を盛り上げる」という意識が芽生え、将来のキャリアにつながれば望ましい。入間市が既に取り組んでいる「社会に開かれた教育課程」は、授業実施の面で一定のハードルがあるが、さらに推進することが重要であると考えている。</p>
山本委員	各学校で様々な取組が行われているが、企業と連携した授業を実施した

発 言 者	発 言 内 容
	<p>けではこどもの能力が伸びるとは限らず、そこに教員の指導が加わることで効果がより高まると考える。企業側も学校教育に関わりたい意向がある一方で、</p>
橋本委員	<p>学校との連携の難しさを感じている可能性がある。連携の仕組みづくりに加え、教員側の経験の蓄積も必要ではないか。また、地域のつながりが強い地区の学校では積極的な取組が進んでいるように見えるが、豊岡地区等の転出入者が多いと思われる地域の学校における取組状況がどのようなかが気になった。市全域で推進されていくとよい。</p> <p>視察研修で石川県を訪問した際、子どもたちが祭りの運営に主体的に関わり、子どもたちの発案をもとに地域の大人が動く取組を見聞した。過疎化対策として地域交流を強化する試みと聞き、この経験があったからこそ地震の際に中学生が活躍したとの話もあった。また、藤沢地区にある有志のネットワーク「元気が出るふじさわ未来ネット」の「夢プロジェクト」では、地域課題の聞き取りを行い、「竹の管理をどうにかしたい」という意見を受け、学生が竹を刈り取り、刈り取った竹を活用して祭り等のイベントで販売する取組があった。こどもの頃の体験を通じて、「入間市内の企業に就職したい」「入間市を盛り上げたい」と考える人が増えるようにしていきたい。</p>
齋藤良徳委員	<p>教育大綱にこういった内容が盛り込まれることに賛成である。各学校では紹介のあった事例以外にも数多くの取組をしていることと推察する。こういった取組を各学校で共有できるよう努めてほしい。また、宮寺地区の小学校ではお囃子体験を授業で実施していると聞いている。自身も藤沢地区の子どもたちに授業で獅子舞を披露しているが、授業内での体験は短時間であるため、実際の祭りの場で見学できるとよりよい。祭り当日の引率を教員が担う必要は必ずしもなく、地域による見守りのもとで見学を促す方法も考えられる。</p>
齋藤悟委員	<p>ICT 社会の進展を踏まえると、今後求められるのは知識理解だけでなく、感</p>

発 言 者	発 言 内 容
	<p>動を伴う体験である。体験を起点として児童生徒が課題を見出し、解決する機会があることが望ましいが、義務教育の枠内でそこまで到達することは容易ではない。</p> <p>民間リソースを活用した体験学習を通じて、こどもたちが入間市の良さを実感し、「自分は入間市にどう貢献できるか」を考える契機につなげたい。また、新学習指導要領のもとでは、学校ごとの教育課程の設計が一層求められている。特色ある教育課程の作成には、教員が情報に触れられる仕組みが必要であり、市内各学校の特色ある取組を共有できるシステムがあるとよい。そういったシステムがあると教員の省力化につながるとともに既存事業の質的向上にも活用できると考える。</p> <p>4. 報告事項</p> <p>(1) ヤングケアラー支援シンポジウムの実施について</p> <p>企画部長 「ヤングケアラー支援シンポジウムの実施について」、こども支援部より説明を願う。</p> <p>こども支援部長 ヤングケアラー支援シンポジウムの実施について、説明する。 (資料2)の「全国ヤングケアラー支援シンポジウム 2025from 入間～日本初の条例制定市の『次の一手』～ 事業概要報告」を説明</p> <p>企画部長 ただいまの報告事項については、市長の強いリーダーシップのもと、取り組んできたものである。補足等あればお願いする。</p> <p>市長 ヤングケアラー支援シンポジウムを契機に、入間市のヤングケアラー支援の取組を整理した。これまでは実態調査により把握したヤングケアラーを支援してきたが、調査で把握できなかった、認定には至らないものの注意が必要なことも含め、一人残らず把握することを主旨としている。</p>

発 言 者	発 言 内 容
企画部長	<p>ヤングケアラーの実態調査は未実施の自治体も多く、こども家庭庁が全国に実施を呼び掛けている段階である。その中で入間市は来年度には 3 回目の実態調査を実施する予定であり、全国のモデルケースとなれるように取組を進めたい。</p> <p>有識者からは「支援には学校の関わりが重要」との意見が多い一方、「学校に過度な負担が生じないよう配慮すべき」との指摘もある。入間市の支援が進展した背景には学校との連携がある。引き続き連携しながら支援を推進したい。</p> <p>それでは報告事項について意見交換を行う。委員のご意見を願います。</p>
橋本委員	<p>要介護認定に「要支援」「要介護」の2種類があるように、入間市が行うヤングケアラー認定についても複数の種類を設定しているのか。また、昨年までヤングケアラーに該当していなかったこどもが、家庭の事情に変化があり今は該当しているという事例もあると思うがどのように対応するのか。</p>
島田主幹	<p>ヤングケアラー支援については、ヤングケアラーではない「A 予備軍」、「B 要注意」と、ヤングケアラーである「C 未支援」、「支援」に設定している。</p> <p>なお、学校での実態調査は令和8年度から年1回毎年実施する予定である。</p>
齋藤悟委員	<p>入間市はヤングケアラー支援の最先端で喜ばしい。この取組に対する市民の認識をもっと広めてほしい。</p> <p>5.その他</p>

発 言 者	発 言 内 容
企画部長	何か発議があれば、願います。
こども支援部長	<p>公園看板の設置について報告する。</p> <p>遊びは、こどもの非認知能力を高めるうえで重要な成長の過程であり、権利でもある。しかし地域の方々から「公園で遊んでいる声がうるさい」、「ボール遊びは危ない」等のお声をいただくことがある。そういった地域の声に対し、藤沢東小学校ではこどもたち自身で、公園で遊ぶルールを決めて、藤沢中央公園に張り紙を設置した。これを受けて入間市でもこどもの遊ぶ権利を大切にすることを示すため、看板を作成した。約250ある市内の公園のうち、現時点で50カ所に設置したところであり、今後、順次、設置していく予定である。</p>
企画部長	連絡事項として、事務局より、次回の総合教育会議の日程について申し上げる。
企画部副参事	次回の総合教育会議は、令和8年3月下旬の開催を予定している。詳細等が決まり次第、改めて連絡する。
企画部長	<p>6. 閉会</p> <p>以上で閉会とする。</p>

